

KCI 設立 40 周年記念インタビュー

文化を創る (第 1 回) —KCI とともに 35 年

深井晃子

京都服飾文化研究財団理事、名誉キュレーター

KCI's 40th-anniversary Interviews (1)

Akiko FUKAI

Director and Curator Emeritus, The Kyoto Costume Institute

To memorialize the celebration of its 40th anniversary this year, the Kyoto Costume Institute (KCI) decided to interview persons who have played important roles in its history. The first interviewee in this series is Ms. Akiko Fukai, who has been leading the KCI's activities as chief curator. We interviewed her about exhibition planning and fashion history research.

After her return from studying in Paris, France, Ms. Fukai joined the KCI and commenced her career as a curator. She dedicated herself to developing the KCI, still newly-founded, into an internationally prestigious institute, making efforts to expand its costume collection. In collecting she focused on academic value and visual attraction. She explained that she trained her own ability to evaluate costumes by directly observing Paris and Milan collections. She then planned exhibitions based on the items she had thus gathered as a KCI curator. Because the KCI does not own an exhibition space, the institute usually co-organized exhibitions with museums. She recollects that, because they would not agree on the exhibition if the plan was poor, proposing an impressive exhibition was important and she prepared her proposals very carefully. Because museums in Japan were not very positive about holding fashion exhibitions, she promoted the KCI collection to museums in other countries to hold exhibitions, while writing books to inform the public about the collection.

Asked about any confusion between being an individual researcher and being a member of the organization, she said that she never experienced such complications. She successfully managed to link her own research interests with the scope of the KCI. She added that, to move an organization forward, teamwork led by a highly unifying leader is important, while the activities of individual members should be respected.

As a future challenge facing the KCI, she explained that strengthening its financial base

is the most important aspect. Although the institute is supported by donations from Wacoal Holdings Corp., she suggested that finding additional sponsors would be advisable. She added that the current donor could better inform the world of its contribution to the KCI. In conclusion she expressed her belief that it is important to be conscious that KCI's collection is a treasure of world-scale significance representing human culture.

KCI は今年（2018 年）で設立 40 周年を迎えました。『Fashion Talks...』ではそれを記念し、過去を振り返るとともに未来を見据えるため、これまで財団に貢献くださった方々を中心に、連続企画としてインタビューを実施します。第 1 回は長らく展覧会企画や服飾史研究を通じて KCI の活動を牽引してこられ、2015 年に名誉キュレーターになられた深井晃子さんにお話を伺います。

私と KCI の出会い

深井：初めに私がなぜファッションの美術館に興味を持ったのかを、お話したいと思います。それは私がパリにいたことと大きく関わっています。KCI は今年で 40 周年ですが、パリのポンピドゥーセンターは昨年が 40 周年だったんです。その設計・建設に当たったピアノ／ロジャース・チームに建築家の夫が加わっており、私はパリで学校に行っていました。その頃ポンピドゥーセンターはまだ巨大な穴だったんですが、コンペでこの超斬新なデザインが選ばれた時から、ものすごい批評の対象になっていました。それで「どうして皆、美術館にあれほど騒ぐのか」という疑問が起こり、以前にもまして美術館に興味を持つようになりました。

私はパリに行く前に帝人株式会社で、ファッションの情報収集を担当していました。その時、服飾が学問の対象外だと思い知りました。服というのはあまりに身近な対象だから、それを客観視することが難しいんですね。パリの経験で、美術館という制度の中でそのような身近な対象を再考したらどうなるのかと思いました。だから、ファッションを客観化させる手段として美術館で働くことに興味を持ちました。

しかし、私がパリから帰国したときはまだ KCI はありませんでした。1 年ほど後、KCI 設立の新聞記事を偶然みつけて、「これは私に合っている」と思い、設立者で前理事長の塚本幸一さんに会いに行きました。それが KCI と私の関係の始まりです。当時、塚本さんは「文化は力なり」と仰っていました。KCI はワコールが一流企業になった、その証として設立されたのです。ルネサンスのメジチ家のことはよく知られていますが、今や誰もが

言っているように、経済力だけではなく、やはり文化の力が、その国の、そして組織の持続力になるとフランスで実感しました。経済と文化は両輪として上手く回していかないと企業の力にならないし、また国の力にもならないと思いますね。

KCIの発展期——研究機関・コレクション・展覧会

KCI：KCIに入られてからはいかがでしょうか。まだ設立してから間もない時期だったと思いますが、そこから現在の状況に至る過程のなかで、具体的に力を入れられたことや苦労されたことなどについてお聞かせください。

深井：KCIは京都服飾文化研究財団ですよ。でも仕事をするようになってみると、KCIは研究機関ではなく、企業でした。それは当然のことで、研究に一番近いのは私1人でした。ですから、他にも研究のバックグラウンドを持つ人に入ってほしかったのですが、入ってもなかなか定着する人がいませんでした。企業的な体質に合わなかったのでしょうか。私は当時KCIが美術館として世界に向かうには——というのもファッションの美術館は世界が活動の場ですから——研究機関としても認められ、そのため研究が非常に重要だと思いました。

KCIで仕事をするようになった時、私は大学と関係を持っていました。だから、その関係を断ち切らないでおいたのは、せめて私だけでも研究の窓口になろうと、二足の草鞋を履き、それを続けたわけです。私の悲願のひとつは、KCIが研究機関の証でもある科研費申請機関として認定されることだったのですが、ようやく研究機関としての枠が美術館にも広がり2012年に認定を受けました。

KCI：そうですね。科研費の申請機関であることは、研究者がKCIで働きたいと思う理由のひとつになっていると思います。

深井：活動において衣装のコレクションは最重要です。KCIはゼロからのスタートでした。収集にはKCI設立以前から協力下さっていた金井純さんの力が大きかったです。彼女がニューヨークから情報を送って下さり、私はパリコレへ行く手掛かりを持っていたのでヨーロッパを担当しました。古いモノを集めるというのはもちろん大切ですが、コレクションで特に難しいのは、今のモノを集めるほうですね。私が1979-2004年の間、パリコレに毎回行ったのは、今のファッションの動きを正確に把握することが、過去と今、そして未来をつなぐ道を正しく見通す尺度となると考えたからです。

モノを選ぶときに私が重視するのは、学術的な価値があることとビジュアル的な価値があることです。論文が書けるモノと展覧会で人を惹き付けるモノ。パッと見てすぐにそういう価値を持っているとわかるモノもありますが、よく目を凝らしてみないとわからないモノもあります。しかし、やはり本物はそのような力を発信しています。私が恵まれていたのは、それをしっかりと受け取る力があつたことかもしれません。それは、パリコレ

だけではなく、様々なことを教えてくれるモノを実際に数多く見ることで養われたのでしようが、その裏付けとなる勉強も随分しましたよ。

私は1979年からパリとミラノのコレクションに行き始めました。そのための経費はKCIではなく、取材をすることで雑誌社やテレビ局から出してもらいました。パリコレは、今では考えられないような流行を決定する絶大な力を持っていました。また、日本人のファッション・デザイナーたちが活躍し始めた時期だったから、彼らの活躍ぶりを肌で感じました。80年代初め、パリコレではフランスやイタリア製の服を着ていないと恥ずかしかった。ところが、私はヨウジ・ヤマモトやコムデギャルソンの服を着ていくようになって「あなたの服どこで買ったの?すごいすてき!」と、たびたび声を掛けられました。それは日本人のファッション・デザイナーがファッションの歴史を変えていく転換点だったのです。KCIはそれらの作品を収集しました。ある時、コムデギャルソンの武田さんからお電話を頂きました。何と作品を寄贈したいというお申し出でした。それは2000ピース近くに及ぶ服と、それと共に驚くほどきっちり整理されたリストも一緒でした。あの時は本当に嬉しかったですね。私にとってとても大きな出来事でした。

KCI: KCIのコレクションを形成していく上で、ディーラーや寄贈者の方々の存在は本当に大きいものがあると思います。その開拓をなされたことはアカデミックな研究機関であると同時に、ファッションの展覧会を開催するという美術館の要素もあわせもつKCIにとって非常に重要なことですね。

深井: 展覧会は展示施設がないKCIにとって、活動の発信として最重要です。KCI最初の展覧会は1979年「浪漫衣裳展」でした。この展覧会はメトロポリタン美術館の故ステラ・ブラムさんがキュレーターでしたから、私はお手伝いをしながら展覧会づくりを学習していました。その後、大きな展覧会に関して言えば「華麗な革命」から「Future Beauty」まで中心に関わりました。「華麗な革命」はフランス革命前後のファッションの変化というテーマで、それ自体は難しくありませんでした。でも、とても大変だったことは古い時代の衣装の着せ付けですね。このとき、オペラやバレエの舞台衣装も担当した経験があるマーティン・カマーさんが、彼はディーラーでもあるのですが、素晴らしい着せ付けをしてくれました。あの展覧会は本当にマーティンのおかげだと思います。

今までの展覧会のなかでもっともドキドキしたのは、やはり「モードのジャポニズム」ですね。なぜならジャポニズムに関する研究は、当時美術以外の分野ではほとんど知られておらず、研究も進んでいませんでした。当然ファッション分野での研究はありませんでした。だから、文献はないわけです。私はファッションでもジャポニズムの影響がみられるという仮説を立てました。それを実物の衣服資料で実証し、論証していくという展覧会を企画したのです。こんな大掛かりな展覧会を思いついたきっかけは、ある時収蔵庫で、1920年代の衣装がフラットに、棚の引き出しに収納されていたのにと疑問を持ったことです。ヨーロッパの服は立体的ですから、収蔵庫では大方がハンガーにかけられて収蔵されます。ところが1920年代の服は平らで、引出しに入っていたのです。前の時代とは明

らかに構造が違う、と気づいたのです。それでジャポニズムという視点でファッションを見た時、多くのことが見えてきました。仮説の実証には、不安もありましたが、とても面白かったです。

しかし、こうした展覧会のテーマ設定以上に大変だったのは、KCIが展覧会を開くハコ、場所を持っていないことでした。これはやはり一番つらかったです。美術館を作るといふ計画は以前からありました。塚本幸一さんもそれを考えておられました。現在も実現されていません。だから、KCIの活動を発信していくためには展覧会の会場を探さなければなりません。幸運にも「華麗な革命」は京都での開催後、ニューヨーク州立ファッション工科大学とパリの装飾美術館がやりたいと言ってくれました。ところが、アメリカやイギリスと違って、フランスの美術館は、こちらがある程度の資金を用意しなければなりません。KCI自体にはその準備がないわけです。ようやく、当時ルイ・ヴィトンやランバンの社長だったアンリ・ラカミエさんが資金援助して下さることになり、パリで開催出来ました。この展覧会は高い評価を受けてKCIが海外に知られるきっかけになりました。

自館がないKCIにとって、展覧会の内容は生命線です。大物の持参金付きなら別かもしれませんが、内容以外に、他の美術館はよその企画を受けてくれません。会場探しが大変と言いましたが、「モードのジャポニズム」については内容が評価されて、多くの美術館から受け入れ要請が来たので、会場探しをする必要はなかったんです。でも、別の意味で、つまり情報収集で大変でした。当時はネットなどない時代でしたから、まず現キュレーターの周防珠実さんが100館以上の世界中の美術館に手紙を書いて、ジャポニズムに関係する衣装の所蔵を突き止め、それから実物確認をしました。結果として、仮説が成り立つと確信したんです。最終的にこの展覧会には、その中の10館の美術館から衣装を借りたんですが、このことが、また別の道を切り拓いてくれたのです。京都のジャポ展オープニングにやってきたクーリエの中に、パリの市立衣装美術館(ガリエラ)の館長カトリーヌ・ジョワンディエートルルさんもいました。普段貸し出しの際に館長がクーリエで来ることはないけれど、彼女はジャポニズムに興味を持っていたのです。展覧会を見て「パリでやりたい」と言いました。でも、お金の問題があったわけですが、このとき幸運だったのは当時のパリ市長ジャック・シラクさんが、京都が大好きだったことです。京都市とパリは文化姉妹都市の提携を結んでいましたし、結果として京都市の助成を受けることができ、パリで「モードのジャポニズム」が開催されました。その後、この展覧会は何か所も世界巡回するんですが、それは内容を評価した開催美術館のキュレーターが、熱心に実現に向けて動いてくれたからです。

「Future Beauty」はまた違います。これは私がどうしてもやりたいテーマでしたから、企画売り込みに出かけました。テーマの性質から、ニューヨークのメトロポリタン美術館、パリの装飾美術館、ロンドンのヴィクトリア&アルバート美術館かバービカンに狙いを定めました。まずニューヨークで当時キュレーターのハロルド・コーダさんに会いまし

た。そしたら「晃子、これは面白いけれど、ここでは出来ない」って断られてしまった。次に会ったのがパリの装飾美術館の当時展覧会責任者だったオリビエ・サイヤールさんで、彼は即座に「やりたい」って言うてくれました。ほっとしました。ロンドンではヴィクトリア&アルバート美術館のキュレーターがその時不在で会えず、バービカンのキュレーターと話すことになりました。彼女は「やりたい」って即答し、ロンドンが決まりました。「パリとロンドンの両方で開催できる、これで私は京都へ帰れる！」と思いました。

それからしばらくして、京都近代美術館の河本信治さんのところでミュンヘンのハウスデア・クンストの館長クリス・ディーコンさんと会っていた最中、パリから電話がかかってきたんです。「資金集めは、どうなってるの?」と言うのです。「こちらは実費だけを持つと話したはず」と答えたけど、最終的にお金の問題でパリは暗礁に乗り上げてしまった。展覧会は、お金がないとできないですね。ところが、その時、ディーコンさんが「ミュンヘンでぜひやりたい」と言うてくれ、ミュンヘンが決まりました。ロンドン展が開催されると、多くのキュレーターが見にいき、開催要請が次々に舞い込んだのです。何館もの申し出をお断りしなければならなくて勿体なかった。

KCIに展示施設がないのは、利点もあります。数年に一度の展覧会だから企画内容をじっくり練ることができたこと。でも、会場探しは非常に苦しかった。それに、近美以外の日本の国立美術館は20世紀末まで「ファッションは美術館のテーマではない」と言うていたのも悔しかったです。だから、海外で開催したんです。そのためには、良い展覧会を作る以外になかった。実績を作れば次があるじゃないですか。高いハードルがあったから、結果として、KCIは世界中で展覧会を開催することができるよになりました。あと、『Fashion』の刊行は、常設展示ができないなら、出版でという思いでした。やはりKCIがここまでこられたのも、京都という土地、そして京都国立近代美術館なしにはなかったと思います。京都国立近代美術館は日本の国立美術館で、日本初のファッション展「現代衣服の源流展」を開催しました。私はパリにいたので見てません。この時、三宅一生さん、小池一子さんらの働きが大きかったのですが、この展覧会はKCI設立のきっかけにもなっています。その根底には京都が着る文化を持つ土地なんだということ、長い歴史のなかでその文化的土壌を育んできたからこそだと思いますね。KCIは現在も5年に1度、近美で大きな展覧会を開催しています。

KCIの未来と課題個人と組織・現在のファッション界・財団運営

KCI：深井さんは神戸女子大学や静岡文化芸術大学で教鞭をとり、その他の大学でも非常勤講師を勤められ個人として活躍される一方で、2015年3月までKCIのチーフ・キュレーターとしても組織を引っ張ってこられました。とくに展覧会を作るというのは組織として、チームとしての活動が要だだと思います。その時の個人と組織のバランス、たとえば個

人の研究テーマと KCI のテーマはどのくらいリンクされていたのでしょうか。

深井：自分の研究と KCI のテーマは常に交叉していました。また、大学での別の方向の研究は、展覧会に新しい何かを方向付けてくれることもありました。その逆もある。だから、違うことを両方やるのは、もちろん体力があればという大前提の上ですが、いいと思います。私はチームとしての難しさというのを一度も感じたことはありませんでした。それは私の性格かもしれないし、私が一番年上だったせいかもしれません。みなさんは嫌がっていたかもしれないけど… (笑)。周防さんや新居理絵さんはこんなに研究させられるとは思っていなかったかもしれませんが、展覧会の実施や論文を書いたり、KCI キュレーターとして経験を重ね、しっかりと実績を上げました。

最近 KCI に入った方たちは個々のバックグラウンドを持っていて、自身の研究テーマもきちんと持っているのでしょうか。だから、是非自分たちで研究会を開いたり、私たちが「モードのジャポニズム」の際に芳賀徹先生にお願いして国際日本文化研究センターで研究会を行ったように、他の研究機関とも一緒に研究をしてもらいたいです。しかし、KCI に所属する以上、個々人が別々などところを目指したのでは、KCI としてまとまりがつかなくなってしまう。また、展覧会はチームワークがなければ実現できませんが、同時にリーダーの強い求心力を必要とします。この点もよく認識してほしいと思います。

KCI：先程、文化と経済は両輪だという話がありました。以前はたとえば三宅一生さんや山本耀司さん、川久保玲さんをはじめとするデザイナーたちが活躍されると同時に、深井さんや鷺田清一さんのようにファッションをひとつの学問の対象として扱う人々もあらわれ、ファッション学を立ち上げようとする兆しがありました。ですが、現在のファッション界はそうした力を大きく失っているように思えます。現状を鑑みるとどのように感じていますか。

深井：今はファッションにとって本当に難しい時期だと思うんですね。たとえば 1960、70 年代はファッションがとても重要な社会的現象でした。だから私も、ファッションを研究しようという気になったのでしょうか。大きな流れの中に引っ張られていたわけです。歴史を振り返れば、ファッションが社会的に大きな注目を集めるのは 19 世紀の半ば頃からです。だから印象派の人たちもモードを描いたわけですし、ゾラの小説『ボヌール・デ・ダム百貨店』などを読むとファッションに対する熱が伝わってくるわけです。しかし、そうした熱は、今、冷めています。情報発信性、社会構造などファッションと強い関係を持つものすべてが変わろうとしている。当然ファッションの構造自体も大きく変わる……。たとえば今、10 年前の服でも誰も古いと気が付かないほどです。かつてはあらゆる部分がかたち変わったし、去年の服なんかを着ていたら恥ずかしかった。でも、現在はそれほどの変化が起こっていないのです。もちろん衣服は生産されているけれども、購買の必然性がない。それはファッション界にとって大きな問題だと思います。はっきり言って、今のファッションは面白くなりようがないですね。でも、それは大げさに言えば歴史の必然で、不可抗力なのかもしれません。

しかし、人間が服を着なくなるわけではありません。今、私が興味あるのは原点に戻ることです。それは、例えば、人間の根源的な営みである、材料、糸、テキスタイル等の重要性をもっと理解することもその一つです。また矛盾しているように思えますが、新しいテクノロジーと無関係ではありません。服の構成方法への新しいアプローチ、服の作り手と着る人を繋ぐ手段など、いろいろな側面がありますが、現在はそういった点に興味がありますね。

KCI：最後に、今後の KCI の課題についてお聞かせください。

深井：現在、私は名誉キュレーターですが、展覧会で忙しすぎて、やり残してしまったことがあります。それは、KCI が公益財団法人として今後も継続して安泰であるという運営、仕組みが作れなかったことです。KCI は独立した公益財団法人ですが、ワコールから毎年多額の寄付を頂いています。そのことについて感謝し、とても評価しています。ワコールの KCI に対する支援は現状では大丈夫でしょうが「もう寄付はやめましょう」ということは起こりうるかもしれません。

先日 KCI の理事会で、濱本英輔理事がいみじくも、KCI のようなファッションの発展のために研究している中立的な組織に、一企業としてこれだけの資金的援助をしているところは世界に例がないのではないかと、言われたのです。確かに世界の大ブランドが自社のブランド戦略の一つとして美術館を重要視している例は数多くありますが、なるほど指摘の通り、KCI とワコールの関係は他に例がないでしょう。ここに KCI の今後の方向が示唆されている気がしました。

一つは、これまでの KCI に対するこの素晴らしい貢献を、ワコール自体がもっと多くの人に向かって、世界に向かって訴求し、有効活用することです。KCI の内容は、ワコールの貢献を引き立てるのに十分に、充実していますから。もう一つは、KCI の中立性を前面に出して、KCI はもっと広く資金を集める努力をすることもあり得るということです。

去年私は、ピエール・ベルジェさんが亡くなる前、イブ・サンローラン美術館の学術委員に任命されました。あの財団は決して大きな規模ではありませんが、財団の運営について、未来が担保されていることに感銘を受けました。未来が担保されてこそ、質の高い研究や展覧会ができるわけですから。

KCI の貴重な作品、お宝は、KCI のものというより人類の財産だという認識に立ち、KCI はそれを守り、後世に伝えていく使命を持っています。だからこそ、KCI の土台となる今後の運営のビジョンが明確に示されなくてはならないと思います。KCI が安心して継続した運営ができる仕組みは何か、それを考えていくことこそが、KCI の今後の最も重要な課題だと思います。

KCI：KCI が新しい体制となって、これからどのような未来を描いていくのか。それは大きな課題だと改めて感じました。本日はありがとうございました。

(聞き手：京都服飾文化研究財団)

深井晃子 (Akiko FUKAI)

岡山県生まれ。お茶の水女子大学大学院家政学研究科修士課程修了。京都服飾文化研究財団理事、名誉キュレーター。専門は西洋服飾史、比較文化論。主な単著に『きものとジャポニスム——西洋の眼が見た日本の美意識』（平凡社、2017）、『ファッションから名画を読む』（PHP 研究所、2009）など。主な展覧会に「FUTURE BEAUTY」、「ラグジュアリー——ファッションの欲望」、「COLORS——ファッションと色彩」など。

(肩書は掲載時のものです)